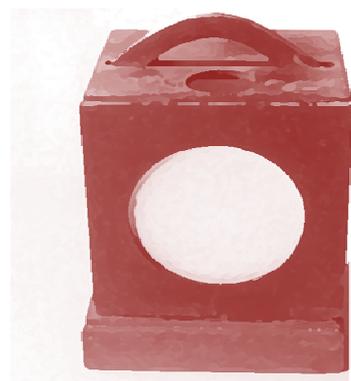
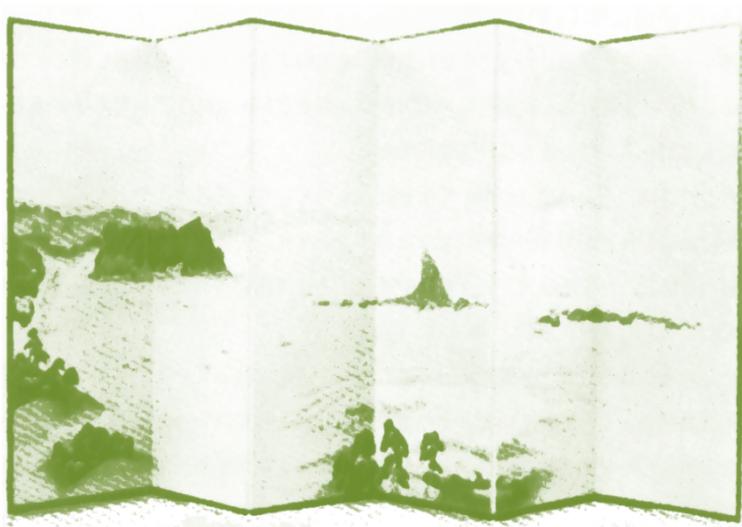


平成22年度 文化資料館特別展

明治大正昭和

茅ヶ崎くらしの博覧会



主催＝茅ヶ崎市教育委員会

はじめに

文化資料館が収蔵している資料は、ただ単に「珍しい」とか、「貴重」、「懐かしい」というだけでなく、茅ヶ崎のくらしを記録した重要な「宝もの」です。「宝もの」の一つ一つが、人々の生活の営みと時代を映し出す象徴であり、まちのかけがえのない文化財です。

昭和が平成になり、すでに22年が経過しました。時代の流れる速度が加速度を増しているように感じる今日、過去そして現在を記録、保存することは重要視されつつあります。過去だけでなく、当たり前のように過ぎていく現在のことを遺していくことで、次世代に茅ヶ崎を伝えることができるようになります。また「宝もの」である資料を通じて、過去と現在、そして未来をつなぐことが可能となります。

今回の特別展では、「くらしの博覧会」と題し、文化資料館がこれまで収集してきました「宝もの」のうち、未公開だったものを中心に紹介していきます。まちの「宝もの」を通じて、茅ヶ崎というまちの魅力を発見していただければと思います。

モノを集める

モノを集めるということをしている、もしくはかつてしたことはありませんか？

モノを集める「コレクション」は、人間の「獲得する」という本能に結びついていると言われています。モノを集める行為の起原をたどっていくと、旧石器時代にさかのぼることができると言われています。博物館の歴史の始まりは、そういった個人コレクターとそのコレクションなのです。

それでは、博物館がモノを収集して保存することと、個人コレクションの違いはなんでしょうか？

一番の違いは、博物館や美術館は、社会や地域のニーズに応え、学術的な研究に基づいて、計画的かつ合理的にモノを収集し、地域だけでなく国の大切な財産として保存していることです。

そして、テーマにそって収集したものを、時間やかたち、機能といった特色に応じて並べ展示することで、新たな価値や感動を生み出します。そして博物館は、モノとそこに含まれる情報を、次世代に伝えるという社会的な役割を担っていることです。

資料番号1

文化資料館が開館した、昭和46(1971)年は高度経済成長期のまっただ中で、それまでのくらしが失われていくことが危惧されていました。茅ヶ崎のくらしの記憶やモノ、情報をできるだけ多く失われる前に収集し保存することから、文化資料館の活動が始まりました。そして、収集された資料は、かたちや寸法、使われ方、製作時期などの細かなデータともに保存されています。

今回紹介するのは、5万点を超える資料の中でも記念すべき資料番号1番、室田に住む市民から寄贈された「櫃」です。

オヒツは炊いたご飯を一時的に保管する容器です。家庭で一般的に使用するものは白木のオヒツです。このオヒツはヒノキが用いられ、その美しい木目を残すために木地呂塗きぢろまという技法で漆塗りが施されています。ハレの日や来客があった際に使用されたものです。

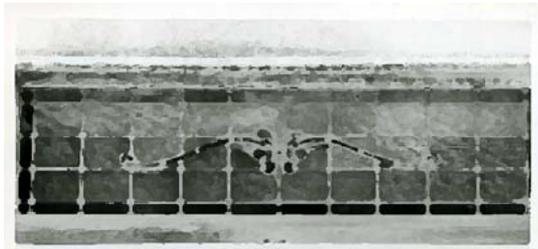


資料番号1番「木地呂塗曲物櫃」

モノからみえるもの

オヒツという情報だけでは、ただの木製の入れ物で終わってしまいます。しかし、このオヒツがどのように入手され、どのように使われていたか、といった情報とともに保存することで、当時のくらしの記憶、そして使っていた人のかけがえのない思い出を保存し、次世代に伝えることができるのです。

文化資料館にある資料は、国や県の大きな博物館がもっているようなものばかりではありません。茅ヶ崎というまちの人々のくらしの記憶や思い出といった、小さいけれども確かでかけがえのない宝ものたちです。このようなまちの宝ものを守り伝えることで、過去と現在、そして未来につなげていくことができるのではないのでしょうか。



特別展「明治大正昭和 茅ヶ崎くらしの博覧会」

主催 茅ヶ崎市教育委員会

茅ヶ崎市文化資料館（担当：須藤 格）

発行 平成 23（2011）年 2 月

<http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kankou/8137/010670.html>

shiryoukan@city.chigasaki.kanagawa.jp